# はじめに

社会では一般的に、人格のすぐれた人、人間として立派な人のことを「徳のある人」とか「有徳の人」、また「人徳のある人」という。しかし、そういう言葉で表現されるのは、その対象と目的によって「徳」とされるのであって、そこに絶対的な価値観が込められているとは思えない。

わたくしは、徳についての要素は、全ての人間（地域・宗教も含めて）にそれぞれ備わっていると考えている。従って、一般的には絶対に相容れない民族の対立や、宗教問題についても、そこには必ず徳を称する者が存在する。人々から人徳者と呼ばれる者がいる。換言すれば、民族問題、宗教戦争を含めてつねに極点対極点、正義対正義という対立的な場にありながら、それぞれに有徳と称する者の対立的な人物が存在することは否定できない。まさに、徳に尽度がないところから生じる矛盾である。

徳とは人間としての充実にかんする卓越性であるとする孟子が示した見解と、徳とは社会のなかで他者とうまく交流することに寄与するような傾向性であるとする王陽明が示した見解の二つである。

（『ケンブリッジ・コンパニオン　徳倫理学』　ダニエル・C・ラッセル　Daniel C. Russell 編　立花幸司 監訳　二九頁）

意志の自律とは、意志が己れ自身に対して（意欲の諸対象の如何なる性質にも左右されることなく）法則となるという意志の性質である。（略）自律の原理が道徳の唯一の原理であることは、道徳性の諸概念の単なる分析によって十分よく明らかにすることができる。

（『道徳的形而上学の基礎』　イマニエル・カント　Immanuel Kant（一七二四～一八〇四）著　豊川昇 訳　一三二頁）





アリストテレースは凡て徳は中庸にあるとなし、例えば勇気は粗暴と怯弱との中庸で、節倹は吝嗇と浪費との中庸であるといった。

（『善の研究』　西田幾多郎（一八七〇～一九四五）著　二二九頁）

これらは洋の東西にわたる「徳」あるいは「道徳」に関して諸氏の論述するところである。勿論、これらの他にも「徳」あるいは「道徳」にかかわる議論は数多くなされているところである。

なお、「徳」についての字義解説は、本文中に展開しているので（二二頁）、そちらをご一読下されば幸いである。

ところで、本稿にあっては、これらの視座とは趣きを異にし、「公徳」について論述するものであることを予めお断わりする。

「公徳心」といわれる倫理の表現は、厳密には「徳」として括られる意味とは異なる。

「公徳心」の英文表記については「Kotokushin」と、ローマ字表記にするか、もしくは unbiased harmony（不偏 調和）が適切と考えている。

人類にとって普遍的な価値は、公徳心をわきまえることにあると考えている。公徳の理念は、人類の「和」を表象するものであり、「和」は人類の相克（あらそい）を超越したところに存在する日本の美徳でありアイデンティティ（identity）であると思う。

本来、日本人にとって「和」は律令制度の確立と相俟って、倫理と国家憲法の原点をなす聖徳太子の「十七条憲法」の第一条に顕示されている理念である。日本国民に伝承されてきた民族の精神を反映させた、国の社会資本の重要な一つであると考えている。外国人から見た日本人の優しさ、あるいは「おもてなし」の心も、この和の精神と無縁ではない。

世間には公徳と定義せずとも、既に実践されている倫理の中に公徳と認められる、





あるいは公徳の範疇と考えられる行為、思惟は存在するものと考える。倫理という表現をもって公徳を論じる際に留意すべきことは、人類が歩んできた歴史の中にも、それぞれの歴史に応じた倫理が存在したという事実は否定できないということである。すなわち封建社会の倫理もあれば、資本主義社会の倫理、社会主義社会の倫理、更には特定の宗教至上主義社会の倫理もあり、これらの倫理の基準は決して同一のものではない。

しかも、その現実は人類の倫理という継続性を装いながら現代においてすら自己あるいは群（むれ）の主張する倫理のみが永遠不変の倫理の正統であるとする国際社会の一部に見られる現実もある。かつて、ギリシャの昔、プロタゴラス（Prōtagorās BC五〇〇～BC四三〇）が「人は万物の尺度」と吐露した如く、倫理もそれぞれの群（むれ）、あるいは集合体によって、それぞれの基準に左右されながら存在認識されているという現実も否定できない。

かかる矛盾をはらみながら、現代の国際社会は持続可能な人類社会の構築といった崇高な方向性を人類に期待しているのが実情であると言えなくもない。

かりに、東アジアにおける実情を俯瞰するならば、日本と周辺の国々には多くの共通性もあるが、その共通項では補いきれない重篤な異質性が数多く存在する。

六年前の東日本大震災（二〇一一年三月十一日）の混乱の際にも、国民のそれぞれが自制心を失うことなく、互助の精神を遵守して行動した姿は、日本人のアイデンティティとして、国際社会に驚きと多くの感動を与えた。

国際社会にありがちな個人主義、あるいはポピュリズム（Populism）、更には極度に台頭いちじるしい民族主義、あるいは領土拡張主義が強まり、各地で事件が多発している国際環境にあって、日本民族に伝承される和と公徳心を基本とするアイデンティティは、まさに世界に誇りうる国家資本であると考える。